慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ：社会調査史研究の視角と都市社会学
Sub Title	
Author	松尾, 浩一郎(Matsuo, Koichiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.135- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

社会調査史研究の視角と都市社会学

松尾　浩一郎

何かを書く者にとって、良き読み手を得ることほど嬉しいことはない。ここに素晴らしい書評を執筆してくださった石井氏には心より御礼を申し上げたい。そのなかで提起されているいくつかの問いに応えることで、少しでも著者としての責務を果たしたいと思う。

評者は、本書の意義と、さらなる展開が期待される論点――つまり課題を、を 3 点ずつ挙げている。それらは大別すると、社会調査史という歴史叙述の方法に関するものと（意義の第 1 と第 2、課題の第 1)、その結果として描き出された都市社会学ないし都市社会学史の像に関するものの（意義の第 3、課題の第 2 と第 3)、おおむねふたつの系列からなっている。

まず後者の系列から考えてみたい。評者は「本書が示す歴史像は論争的なもの」（第 6 段落）であると述べている。都市社会学についての議論として位置付けた場合、たしかに本書にはそのような性質があるといえそうである。おそらく都市社会学史と期待して本書を手にされた読者の多くは、違和感やそれに近い感覚を持ったのではないだろうか。とくに、1960 年代までで叙述を終えていることは、その違和感の主な源泉になっているのではないかと思われる。評者が課題の第 2 で指摘しているように、今日のわれわれは、それ以降の半世紀に及ぶ展開を既に経験し、知っている。にもかかわらず本書では、それらをほとんど無視し、あるいは「なかったこと」にして、議論を進めている。その結果として、今日の都市社会学についての理解を深めるのには直接的に役立つとはいえない要素が出てきたのは、確かに否定できない。

限られた時期までしか扱わなかったのは、もちろん著者の視野の狭さと力不足に帰因するものである。ただ、自分なりの積極的な動機を持って、あえてそのようにしたという側面もないではない。本書で目指したのは、今日の視点から見た「系譜」を重視する学史観から自由になることであった。ひとつの学問の歴史に一本の系譜が存在することを前提として過去を捉えようとするならば、どうしても現時点にまで連なっているものにしか目が向きづらくなる。しかし実際には、途切れた流れや、忘れられた流れ、あるいは別の隠れた流れも存在しているはずである。それらが「淘汰」され、現在に連なる流れが「選択」されていった瞬間を、ひとつの意味ある歴史的事象、出来事として改めて取り上げ、その「選択」のメカニズム――あるいはその成り行き――を考えてみたかったのである。

その結果として本書で描かれた都市社会学像をいかに評価するのかについては、もはや読者諸賢のご批判を仰ぐのみである。著者としては、ある時期に社会調査の歴史的展開の波の直撃を受け、それを利用し、翻弄され、乗り越えようとしていったという面に着目した本書の切り

松尾浩一郎「著者リプライ：社会調査史研究の視角と都市社会学」
三田社会学第 21 号（2016 年 7 月）135-136 頁

口に、一定の価値と妥当性、あるいは必然性があるのだと信じたいと思う。

評者が投げかけているもうひとつの論点、つまり社会調査史という歴史叙述のあり方についても触れておきたい。そもそも、本書にまとめられた諸研究の大半は、「都市社会学」や「都市社会学史」を意識して始められたものではなかった。少なくとも自身の主観的な動機としては、取り組んできたのはあくまでも「社会調査史研究」であった。極端に表現すれば、まず社会調査史研究の一事例として都市社会調査の歴史に着目したのであって、都市社会学の形成について論じたのはその一環なのだともいえる（「都市社会学」を大々的に掲げたタイトルとなったのは本意ではなかったのだが、受け入れざるを得なかった）。

社会調査史は、これまでの一般的な学史研究・学説史研究とは異なった視角から、新しい知見や気づきを生み出しうる大きな可能性を持っている。ある調査者が、自身の置かれた社会的歴史的文脈の上で、何らかのものに問題を見出して対象化し、その調査研究を試みようとしたことをひとつの社会的出来事として捉えると、視界が一気に開けるように多くのものが見えてくる。このような視点をとる研究は、本書だけでなく、近年になって活発に行われはじめている。例えば、深い次元でフィールド調査に立脚して存在している人類学では、社会調査史の視角からの学史記述がさまざまに試みられている（中生勝美、2016、『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』風響社など）。

先人たちが築いてきた社会調査の歴史は、汲めども尽きぬ手付かずの鉱脈のようである。本書で試みたのは、その中からごく一部のものを選び出して検討することであった。評者が課題の第 1 で指摘するように、異なる事例に光を当て異なるアプローチで研究を進めていく余地は大きい。本書での貧しい成果に満足することなく、さらなる探究を目指したい。

（まつおこういちろう　帝京大学経済学部）